千種日記

下

鈴木棠三
小池章太郎 編

古典文庫

千種日記

鈴木棠三
小池章太郎 編

古典文庫

古典文庫第四五二冊

昭和五十九年五月二十日印刷発行　非売品

千種日記　下

編者　鈴木棠三
　　小池章太郎

発行者　吉田幸一

印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番
古典文庫

© KOTEN BUNKO, 1984. Printed in Japan

千種日記

巻七～巻十二

内閣文庫蔵

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

千種日記　巻第七　目録

大坂留止（おほさかりうしならびにいたるかうやさんにき）并到二高野山一記

道頓堀（だうとんぼり）に行て歌舞妓（かぶき）みる事

大坂を出て堺（さかい）に至る事

堺を出て和歌山（わかやま）に至る事

和歌浦（わかのうら）見に行事付高野辻に至る事

高野山に登（のぼ）る事

奥院（おくゐん）に詣（まう）づる事

舟こぞりてなど―船歌の歌詞か。諸藩の御舟手の船歌に模した儀式的な船歌が庶民の間でも接客用に作られていたことを示すか。
蜂の腰―蜂腰（ホウヨウ）腰折歌。

千種日記　巻第七

大坂留止并到高野山記　五月十四日より同廿日に至る

道頓堀に行て歌舞妓見る事

五月十四日。天晴。なを大坂に留まる。今日は主まうけして、前の河より舟に乗て、道頓堀といふ所へ歌舞妓みに行。舟の内、河風ふき入ていと涼しう、そらだきの香吹きをとづれて、十二、三ばかりなる童の、髪は禿にて茶もてくる手つき、いとらうたげ也。日のさす方は幕などはしらかさせしが、なを風にふきあげて、あはたゞしげなり。とかうするに、白銀の蓋したる銚子に盃持出て、難波橋漕ぎまはすほど、舟こぞりてなどうたふ、面白し。蜂の腰とかい

へる、ふつゝかなる詩など矢立もて書付侍しが、風のさはぎにいづちにかゆきけん。やう〳〵物みる所近げにて太鼓の音のほの聞えて、高き櫓の上に幣めく物みゆる。人々、心かはり足早になりて舟よりあがるに、僕ども扇・煙草入など拾い持てきてさし出す、いとはづかしげ也。慣れたる男有て、「いざゝせ給へ。かう打囃し侍れど、いとはやり侍るに」とてかたへの茶屋に入ぬ。こゝにて衣きかへて、「その挾箱こなたへ」などよぶ。案内の男、「かれこれよりも、大和屋こそ面白けれ」とて、此茶屋にて札といふ物求めて、人々芝居に入ぬ。

左の桟敷の、いたう舞台に近からでよきほどなるにあがりてみる。桟敷にかけ渡したる伊豫簾のうちゆかしげなるに、初めはほのたてし煙草の名残にやとみえし煙は、ところ〴〵にふすぶる空炷物にぞ有ける。左の桟敷には、内に侍りし人の住吉詣での帰さにやあらん、やむごとなき上臈女房四、五人やつしたれどそれとみえて、御簾かけわたし、透影もみえじとかまへたり。何事とはき

大和屋―大和屋甚兵衛座。この時は村上市之丞と山下半左衛門で興行。

内―禁裏。

よしや世中―古今、恋五、読人しらず。「流れてはいもせの山の中に落つる吉野の川のよしや世中」

志賀の上人―志賀寺（崇福寺）の上人。朝寛（朝観）。京極御息所を恋慕し、御息所から慰められたという説話が太平記その他に見える。

真雅僧正―空海の弟でかつ十六弟子の一人。

常磐の山―古今、恋一題しらず、読人しらず「思ひいづる常磐の山の岩つゝじいはねばこそあれ恋しきものを」。この歌により衆道物語『岩つゝじ』の書名が付けられ、岩つゝじといえば衆道を連想するようになった。

左近―荒川左近（若衆方）。

ゝわかねど、密かに物言ふ声して打笑ひたるさま、いとゆへ〳〵しう、けだかう覚ゆ。「業平ならましかば、いかゞはからひ給はん」など、人々笑ひぬ。右の隣りは、田舎侍人とみえて廿余りなる男の、さすがに色白き二、三人、肥ふくれたる髭がちの医者一人有。此医者こそ痴れ者にて、片言まじりの話をしておるざま、いとおかし。しばしありて舞台の幕打揚げて出るをみるに、式三番は形代ばかりにて、その後は水無月の頃、四条河原の涼み帰さに見初めし思ひの晴け所なきざまより始めて、妹背の山の奥深き道のしおりもなくて、吉野河のよしや世中を思ひ捨てつる昔の人によそへて、言の葉をつくし、しなをあらせて、わざとならぬなずらへども、まことにいかなる志賀の上人も心を動かし、真雅僧上の常磐の山の岩つゝじと詠めるもいとことはりやなど覚ゆるに、左近とかやいふ少年、こと人に似ず、いとめでたきまでみゆる。うち重ね着たる綾羅の縫目、いと筋あざやかに、斑濃などさま〳〵に染つくしたる色合は、

立田姫も及ぶまじく、七夕の手もはづかしげなり。物うちいひたるざま、いと上ずめきて、なずらかにもときくに、棧敷も芝居も静まりてみる。金の扇の入る日に輝けるをいとおかしげにとりて、うちあげて歌ふ声らうたげにて、いはん方なく面白うきこゆるに、芝居よりこゑ声にのゝしる、いとおこがましゝ。「まことにかのりせつそいなり」と誉むるは東坡めきて、済家僧か儒学者と見えたり。

やう〳〵事果てゝ、こゝかしこと行巡りて帰る。夜更、月あかきに南の戸明て、東人もろともに起きて勾欄によりて眺めおるに、近きあたりに火燃え出ぬとて、いと騒がし。程もなく静まりて人々臥しぬ。

十五日。天晴。今日は、伴ふ人、大坂の内みに行。我をもいざなひ侍れど、昨日棧敷の暑さの名残に心地も悪しうて留まる。こゝよりは紀の路を経て大和国より京へ帰るべしとて、先立ちて京につかはすべき物など認めさせ、ふとか

のゝしる―かけ声をする。
りせつそいい―李節推の誤り。蠹曲画図「東坡李節推は風水洞のよしみ有て、馬に騎る少年と清艶を諷へり」
済家僧―ザイケソウ。臨済宗の僧。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

柳下恵―周代、魯の賢人。魯の太夫・士師となる。いたずらに自己を潔しとせず、能力の限り汚君にも仕え、小吏の地位をも厭わなかった。著者は仕官に際して筋を通そうという気持が強かったのであろう。

きて、昼よりは、いと静やかに打伏して、来し方の事ども思ひ続くるに、あはれなるふしぶし心に出ける。我、江戸を発ちて後、心に深ういましむること有。今日までは守り怠らでありけることやと喜ぶ。そのかみ、柳下恵が心を思ふに、いと及び難ふ有難きまで覚え侍るに、年老てひたすら世中うとくなりにし後は、自ら色に染み、花になれ行、心薄ふ覚ゆ。かの有馬の湯山なん色欲の巷にて、人多く清き操を撓ますと数を知らず。我深く戒め侍りしが、心に思ふことの色に出るは、俗性に違ひて人の忌むことを知れり。ことさら眼を怒り、かたち作りして人の咎めを受けんことは、却りて己が心の正しからざるより起れり。我は我を責むに忌み憚る事あるべからず。この故に、心に戒め、表に出さず。とやかうやして、人々、我心の奥を知らざりきなど思ふ。夕かけて、父の御墓の石きらすべしとて、石商ふ人など来て物語するに、東人帰りていと騒々しうなりて、書きさしてをきぬ。

大坂を出て堺に至る事

十六日。雨降る。主も、「今日は道もあしかるべし。久しう煩て、かゝる雨に旅立侍らんこともいかゞ」とてなむ留むるに、昼過より雨晴て、日の影、西の障子にほのめくに、「さらば今宵、堺までゆきて、明日は和歌の浦にも」とて、いとあはたゞしゝ。主いたう留むるに、「あるべうもなし」と制して夕かけて出る。再び住吉に詣でたてまつる。東人もろとも住の江に出てうち眺めて、「須磨、明石とは、いづれかまさりざまならん」といふに、いはん方なし。年毎の弥生の初め、此浦の潮、遠く干潟となりて、京よりも人多くきて逍遙する所なり。ながらへ侍らば、その折違へずこゝに来てなど思ふも、聞ても見ても驚かぬ空だのみかなと思ふも、また心なりけり。石の鳥居より南へゆきて橋を渡りて、堺の安立町に入。此町、十町ばかりありて筆結ふ家多し。こゝ

安立町―いま大阪市住吉区安立町一丁目～十丁目あり。

当麻山―金剛山地の北部。東面に当麻寺がある。
葛城山―和歌山県との境にある葛城山脈の西部。修験の山として著明。

を過ぎて左に当麻山・葛城山みゆる。

なを行て堺の町に至る。町の内ゆたかに、人のゆきかひもはしたなからず。まことやある歌に、

世を捨む堺の町やよからまし人の多きを隠家にして

と詠めるもいとことはりや。しかはあれど、市中の隠は堺のみには限るべからずともいふべきにや。又、思ひ返して、里は仁あるをもてなどいひ、旅屋に入ぬ。振袖の女あまたある家にて、煙草の火とり、煎じ茶もち出て、「高野詣でにて御座んすか」とて、そのゝはあへて戯るゝこともなきこそ、空海のまづ手柄なれ。

里は仁あるをもて―風俗習慣が仁厚な里に住まねば智者となり得ないの意に用いた。これは朱子の説によるもので、論語里仁篇「子曰里仁為美、択不処仁、焉得知」の里仁を朱子は「里ハ仁ナルヲ美ト為スー(里は仁厚の俗あるを美となす)と読んだ。しかし「仁ニ里(ラ)ルヲ美ト為スー と読む説が有力である。

堺を出て和歌山に至る事

十七日。天晴。夜深う旅屋を出る。行先の家ども殊更ゆゝしう、京によう似

たり。町の広辻といふ所に、津の国・河内・和泉の境有。この和泉の国は、もと河内の内なりしを、元正天皇霊亀四年、大鳥・日根・和泉の三郡を割て和泉国とすとなん。町を行離れて夜も明行に、四方の山々みえわたる。

左に生駒山みゆる。いたうは高からぬ山なり。少し高き丘に、駕籠たてさせ煙草すひて、東人もろとも眺め居たり。此山は、昔、唐土より渡せし駒を多く放ちて長生を保ちけるとて、かう名付けるとなり。大僧正行基、此山のふもとに住みて、終に天平廿一年、その所にて失せ給ひしと也。今、此山のふもとに塚有となん。昨日の雨の名残に、曇りみ、晴れみ、立ゐる雲やまず。昔覚えてうち眺めつゝ行。業平こゝにきて、此山に雪の降れるをみて、

昨日けふ雲の立まひかくらふは花の林を憂しと成けり

又、高安の里の女の詠める歌に、

君があたりみつゝおゝらん生駒山雲なかへしそ雨はふるとも

和泉国とす―霊亀二年（七一六）河内国の三郡を分けて和泉監を置き、天平宝字元年（七五七）に和泉国とした。

唐土より渡せし駒―百済の照古王が牡馬牝馬各一頭を阿知吉師に付けて貢上した（応神記）との故事による伝説か。

昨日けふ―伊勢物語に君があたり―伊勢物語・新古今、恋五。また万葉十二。

平岡大明神―牧岡神社。大阪府枚岡市出雲井。

わがやどの―後拾遺、夏。津国の古曽部といふ所にて詠める。第五句「見えずなりける」が正。外山―三八七頁参照。秋篠―奈良市秋篠町。菅原―奈良市菅原町。石津―堺市石津町。浜村―「はまてら」の誤か。堺市のうち。高石―高石市高石町。助松―泉大津市助松。津田村―貝塚市津田。貝塚―貝塚市。佐野村―いま泉佐野市

此二首の歌は、伊勢物語にみえたり。昔、業平、高安の里に通ひけることは、平岡大明神の御宮移しの比、業平、物みに行て、小板屋どのとかやのむすめを見て通ひ初けると也。小板屋とは、今の柿葺のこと也。この女の父の家の榱を、柿にて葺きけるを、所の者、珍かに覚えてかう名付けるとなん。今は、世はるかに隔てゝ、その人、名もおさ〳〵知れる人なし。筆のつゐでに、もと聞ける物語を書き続けば、秋の夜のざましていとなが〳〵しや。すべて此山は、詠める哥ども多し。後拾遺、能因法師、

わがやどの梢の夏に成まゝに生駒の山ぞみえずなり行

此山の東は大和国にて、外山・秋篠・菅原などいふ所有とぞ。なを行て、石津・浜村・高石・助松などいふ里を過ぎて、岸和田に至る。此所に城有。津田村・貝塚・佐野村を過ぐる。このわたりの磯を、深日の浦といふなり。新古今、藤原清正、

あまつ風―新古今、雑下。

月清み―新勅撰、冬。久安百首の歌奉りける時、冬の歌。

蟻通の明神―蟻通神社。泉佐野市長滝。

あまつ風吹飯の浦にゐる鶴のなどか雲居に帰らざるべき

勅撰集、俊成、

月清み千鳥なくなり沖つ風ふけゐの浦のあけがたの空

佐野市橋といふ里のこなたの森の内に、蟻通の明神の御社有。森の南より左の異道を経て東へ廻りて石の鳥居有。三町ばかり森の下道を経て御社に至る。この御神は、いづれの御時にか有けん、唐土より七曲の玉を我国に渡せり。その玉に小さき穴有。「この穴に糸を通して返し給はらんや」と、かの国よりいひつかはしたりけるに、その頃、此神中将にておはしましけるが、此穴の内に蜜をもりて蟻の腰に糸をつけて、穴の内へいれ給ひしに、蟻その蜜の気をたづねて穴のあなたへ出ぬ。終に糸を通して返し給ふと也。此中将、後に大臣の位をきはめて失せ給ひ、神となり給ふとなん。そのゝち、こゝにあがめ奉りて蟻通明神と申奉りける。昔、ある人、此御社に通夜し侍りしに、此神、夢に告給御

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb